

第 193 回東葛しぜん観察会

新緑の大津川緑道～栗野の森を歩いてみよう

平田 裕子（柏市）

開催日時：2024 年 5 月 12 日（日）9：30～12：00 天候：曇り

場 所：大津川緑道～栗野の森（鎌ヶ谷市）

参加者：32 名、指導員：20 名（担当指導員：林信・高橋・平田・市村）

鎌ヶ谷市の新しい観察会コースで、32 名の参加者を迎えることができました。東武線六実駅で集合。諸注意、軽い体操の後、3 班に分かれて出発しました。直ぐに踏切、交通量の多い県道の横断もあり、二人の安全担当がしっかり参加者を誘導フォローし、一列縦隊で無事に通過。

初めは民家の垣根のナワシログミの緑の実を観察、黄色い花をつけたハハコグサが春の七草のオギョウであることを伝える。江戸時代の道標の前で松戸江戸道を説明。1750 年代の江戸は百万都市となり魚類が不足したため、幕府は陸上交通を許可し布佐から松戸まで馬で生鮮物を運ぶようになり鮮魚街道の名称が残る。少し進んでエノキの胴吹きを観察、この言葉を初めて知ったという声があがる。北部公民館から大津川緑道への入口にはスダジイの雄花の臭い。昭和 30 年代に水質汚濁ワーストワンとされた手賀沼の原因の4割がこの大津川だったのは驚きです。緑道にたくさんのクサノオウ。茎などを傷つけると出るオレンジ色の乳液は有毒だが鎮痛作用もあり「草の黄」「瘡の王」「草の王」、3 種類の名称の由来を説明、漢字を見て皆さん納得の様子。少し先からはノイバラの芳香。秋に赤く熟す実には利尿・下痢止めの薬効があり、現在はアンチエイジング化粧品に使用されている。

橋の付近でシュロの観察、九州に定着した外来種が温暖化の影響で関東でも増えている。シダレヤナギでは樹皮に鎮痛剤のサルチル酸(アスピリン)が含まれ、今でもサロンパスなどに応用されていることを話す。コウゾリナの群生では丸くなって茎の赤い剛毛を観察、顔刺菜の漢字には「痛そう、顔が血だらけ？」の笑い声があがる。

栗野コミュニティセンターで休憩、水分補給とトイレを済ませて出発。イロハモミジの実がピンクに色づいている。花ですか？ の質問があり、実で熟して茶色になると二つに別れ翼をつけて飛んでいくと説明、参加者のスマホ写真で花を確認。サトイモ科テンナンショウ属では手元の資料をご覧いただきながらムサシアブミとウラシマソウを説明、地中の球茎が大きくなると性転換して雌株になること、実際にウラシマソウの仏炎苞をめくって中に緑色の実があるのを見る。

栗野の森では入口直ぐのギンラン。樹木、菌根菌とギンランとの関係を話す。赤い実をつけたウグイスカグラ、緑の実のハナイカダ、カラタチバナ(百両)もある。ヤブコウジでは落語の寿限無の長い名前に本種が出てくる。エゴノキにオトシブミがついているのを観察。森を出て直ぐウワミズザクラの実を確認、赤く熟した実にはクマリンの芳香があり、塩やお酒に漬けたりする。

解散場所の市制公園に到着。参加者から「植物の名前や由来が聞けて良かった」、「鎌ヶ谷は初めて来たが緑も多く楽しかった」、「エゴノキを覚えた」、「また参加したい」の声をお聞きすることができました。



大津川の木道はよい景観



キク科の黄色いコウゾリナ 顔刺菜



サルトリイバラの葉裏 ハムシの幼虫